

水辺の 生物



ツルヨシ

イネ科ヨシ属

写真提供・校閲：谷城勝弘氏

かつて広大なヨシ原が広がり、「よしず」や「屋根の葺き替え」など日本独特の文化を生んだ日本人に馴染み深い植物ヨシ。ツルヨシは、そのヨシにそっくりで少し小ぶりのイネ科の多年草である。ヨシは茎の高さが3mにもなるが、ツルヨシは大きくても2mほどにしかならない。

ヨシとの差異で最も目立つのは、茎の基部から長さ5～10mにも達する長いランナー（走出枝）を伸ばし、それが地表をはいまわること。このためジシバリ（地縛り）という別名をもち、走出枝がツル状であることからツルヨシと呼ばれる。ツルヨシのランナーは節ごとにくの字形に屈曲するが、その節から芽と根が出て新しい個体が形成され大群落となる。一方、ヨシは地下茎が地中深くを横に伸びて繁殖するので、地上にランナー（走出枝）を出すことは少ない。ツルヨシのランナーの節には毛が密生するが、ヨシの地下茎のそれには通常は毛がないという違いもある。

イネ科植物共通の特徴として、茎は中空で節がある。その節から出る葉の下方は葉鞘^{ようしょう}と呼ばれる茎を取り巻く筒状の部分で、上方は茎から離れて幅2～3cm、長さ10～30cmほどの細長い葉身となる。ツルヨシの葉鞘上部は通常紫色を帯びるが、ヨシのそれは全体に薄い緑色。

ツルヨシは日本全国に分布するが、主に河川の下流域に生育するヨシとは異なる環境を選んでいる。主な生育地は河川の中流域から上流域にかけての河原などで、なかでも砂礫地を好む。洪水などで冠水しても、倒された茎の節から新芽が出てやがて新しい茎と根が形成され、群落は面積を拡大していく。洪水に強く河原の安定に役立つほか、水際部に多様な水生動・植物の生息場所を提供する有益な植物である反面、非常に繁殖力が強いので、異常繁殖によって極めて単調で生物多様性に乏しい河川環境をつくるのが問題となることもある。

7～8月の開花期には、3～4個の小花をつけた長さ8～12mmの小穂がたくさん集って、やや先がたれた長さ25cm～35cmの房状の花序が茎の頂に付く。小花の根元に長毛があるため、小穂が開くと白毛が陽に輝いて目立つ。

参考文献及びHP：

長田武正『日本イネ科植物図譜（増補版）』（平凡社、1993年）

桑原義晴『日本イネ科植物図譜』（全国農村教育協会、2008年）

財団法人河川環境管理財団HP